

農村生活の変化とエネルギー利用 —薪利用を中心に—

○嘉門 洋介・和田 翔太・川村 誠（京大農）

はじめに

現在なお、世界の木材利用の半数は薪炭などエネルギー利用である。しかし、日本において、1950年代後半から農村地域のエネルギー利用は大きく変化した。一般に、燃料革命あるいはエネルギー革命と呼ばれる、地域資源としての薪炭林利用からの転換であったが、単に薪炭から化石燃料へ変わったというだけでなく、土地利用にはじまり農林業はじめ生産活動、地域コミュニティのあり方、さらに家屋の構造から家族生活のあり方にいたるまで、地域生活の全ての変化を伴っていた。いわば地域システムの転換である。

薪利用の後退は、システム転換を具体的な形で示している。地域システムの転換は内的要因と外的な要因の双方が働いたとみるべきだが、薪利用は、前者の内的なシステム転換に強く関わっている。地域生活の内部に生じた変化は、地域システムの転換をより一層、促進したとみてよい。本研究では薪利用を中心に、未だ途上にある地域システムの転換の方向を明らかにし、変化する地域生活の中で、地域資源を生かしたシステムの再構築の方向を考えたい。

研究の方法

近年、政策的に取り上げられ進められている都市農村交流の場合、都市と農村の地域システムの差異を前提に、相互に影響し合うことにより、それぞれの地域で新しいシステムへの転換ないし生まれ変わりが期待されている。一方、地域交流の究極の段階として、移住を希望する人々、いわゆる I ターン者の存在が注目を集めている。単なる交流者ではなく、地域システムの一員として、システムを補い強化する存在として期待されることが多い。しかし、農村らしい生活、地域資源を活用した生活を指向する傾向の強い I ターン者の存在は、地域システムにとって両義的な存在である。今や、既存のシステムが転換する場合のみでなく、システムが入れ替わる場合も考えるべきである。本研究では、入れ替わりの進む山村地域を取り上げ、薪利用を通して地域資源利用のあり方から地域システムの変化について実証的に検討を加える。

調査手法と成果の検討

調査は現在、薪をエネルギーとして利用している家庭を対象に聞き取りを行った。聞き取りはエネルギー利用の実態、及びその変遷、薪を使用しなくなった要因、I ターン者の動向などに焦点をあてた。

調査地は、京都府南丹市美山町知井地区の比較的、I ターン世帯の多い芦生・田歌・江和集落である。美山町は京都府のほぼ中央に位置し、知井地区はその美山町の東半分を占める、人口 886 人（平成 20 年度 4 月現在）の山村地域である。芦生集落は知井地区を東西に流れる由良川最上流部に位置し、その一つ下流に田歌、さらに下手に江和集落がある。知井地区では平成 17 年度以降、地区の振興会を中心に I ターン者を対象とした「新入学祝金制度」や「住宅助成金制度」などの定住化促進対策を実施してきた。その成果として、取り組み以降、7 世帯の定住者受け入れを達成している。今回の調査では、薪利用者への聞き取りがそのまま、I ターン者への聞き取りとなるケースが目立った。なぜなら、既存の住民より I ターン者の方が、薪ストーブという形で薪をより多く使用していた為であり、I ターン者による、地域資源利用のシステム転換を予感させる結果となった。

（連絡先：嘉門 洋介 yosuke08@ares.eonet.ne.jp）

